

7月 エンリッチ講座 プログラム

7月2日(木)

横浜校
17:30~

ジャーナリストは何を撃つべきかー「豊かさ」に居直る若者へー

講演者：丸山 実（雑誌編集長）

司会者：里中哲彦（英語科講師）

7月3日(金)

駒場校
17:30~

医療への化学からのアプローチ・癌を薬で治すには

講演者：高木 繁（名工大助教授）

司会者：照井 俊（化学科講師）

7月6日(月)

駒場校
17:30~

鏡の中の現代社会ー時間、身体、関係の比較社会学ー

講演者：見田宗介（東京大学教授）

司会者：菅 孝行（小論文科講師）

7月7日(火)

立川校
17:00~

キリスト教を考えるー本当に「神は死んだ」のか？ー

講演者：芦川進一（英語科講師）

中西光雄（古文科講師）

7月9日(木)

横浜校
17:30~

ヒトのレンズはなぜ再生しない？

講演者：餅井 真（岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所・助手）

司会者：田部真哉（生物科講師）

7月13日(月)

'92 第2回 サテライト文化講演会

おんなとおとこー「らしさ」の陥穽ー

講演者：青木和子（日本史科） 岡口雅子（地学科） 片山すみこ（日本史科）

高由紀子（英語科） 都築佳枝（生物科） 門田路子（小論文科）

7月14日(火)

一ツ橋ホール

泉谷しげる TALK & LIVE

河合塾

連続講演会

いま《近代日本》を問う

——「過渡期」の思想と表現——

6/25

第一回

進行する自然破壊と現代文学

立松和平(作家)

9/16

第二回

旅人の眼と言葉 ——ヒマラヤからアラビア湾まで——

佐々木幹郎(詩人)

10/1

第三回

演劇ワークショップへの招待

如月小春+noise団員

演劇ワークショップへの招待

如月小春 + 「NOISE」団員



10月1日(木)

17:30~

池袋本校舎5A教室

司会 菅孝行

(小論文科講師)

如月小春 - (きさらぎ・こはる)

劇作家、演出家。1956年東京都生まれ。本名・楫屋正子。1979年東京女子大哲学科卒。在学中より劇団「綺綺」に在籍。79年「ロミオとフリージアのある食卓」82年「工場物語」で、都市とその住人のかかわりを対立の図式に収めず、都市に対する愛情を強く示した視点で描き注目される。83年には集団「NOISE」を設立。ビデオや生の音楽、スライドを役者の身体と並列させ、テクノロジーと演劇の接点を追求。84、85、86年と改訂を重ねた「MORAL」シリーズ、87年「砂漠のように、やさしく」では、都会人の乾いた心情を映す。92年秋、アジア女性演劇会議を計画している。主著『都市民族の芝居小屋』（87年）

「朝日人物事典」を一部加筆

演劇ワークショップへの招待

- ◆ワークショップとは元来《作業場》という意味で、何かの表現媒体による共同作業、集団創作のことを言います。演劇ワークショップというのは従って、演劇を、台本、演出、俳優、装置、照明、音響効果などの担当者の分業によらずに、その場に居合わせたひとびとが共同で作る試みです。ワークショップは世界の至るところで試みられて来ましたが、いずれにせよ、演じる人と観る人の分業、演じる人の内部野分業を当然とする近代欧米の演劇の主流の考え方になじまない人々のなかから生まれ広がった方法でした。
- ◆一つはアジア、ラテンアメリカなど第三世界の、識字運動などにかかわって来た人々の試みです。彼等の場合演劇は芸術の表現や鑑賞であるより、植民地支配の結果宗主国によって奪われた、民族の言葉を獲得する為の媒介であるという要素が濃厚です。第三世界の人々にとって、ワークショップが、奪われた言葉を取り戻し自分の言葉と身振りで自己を認識し自己を表現する媒介であるということは、単に識字にとどまらず、民族解放、自主独立の文化運動としての性格を持ち、様々な社会運動・政治運動と密接に結びついてゆくことになりました。こういうワークショップでは演じる人も見る人も、専門の演劇人とは限りません。うまい下手など問題にもなりません。進行役(トレーナー)を別にすれば、誰もが参加し誰もが観客となり、昨日までとは違った世界に出会う為の《装置》と考えてくれればよいと思います。
- ◆演劇に限らず、なんらかの表現手段によるワークショップは、ひとびとの学習活動の媒介としての役割を果たします。これは、第三世界に限ったことではないので、この方法は欧米、日本などでも試みられ、自分、自分の身のまわりの関係、その延長としての社会を把握し表現し、あるいは表現されたものを見ることによって《身を以て解る》ための、すべての《ただの人》に対して開かれた方法として広くおこなわれるようになりました。
- ◆ワークショップ的方法は、ことばの喪失、心と言葉、言葉とからだの関係の喪失、分裂などという形であらわれた精神の傷や障害の解明やそこからのリハビリテーションにも用いられています。ここでも失われたことばの奪回、発見、それに基づく自己や、自己を取り巻く関係、社会、世界の発見、再発見の糸口としての機能がワークショップに期待されている訳です。
- ◆ワークショップはまた、前衛的なプロフェッショナルな演劇表現のメソッドとしても採用され、ポーランドにおけるグロトフスキの実験演劇や、フランスの太陽劇団の舞台表現に目覚ましい成果をもたらしています。
- ◆勿論本格的なワークショップを始めから終わりまでやり遂げて一つの表現を作り上げるのには、長い時間と手間暇がかかります。今回の催しはほんの入り口の、入門編の入門編です。だからやることは簡単です。誰にでも出来ます。指名されてもやりたくなければやらずに見ている、まあいいです。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

- ◆こんな演劇の作りかたがあるのだということを確かめたい人、そこへちょっとでも参加して集団創作の入り口に立って見たい人、身体と言葉、心と言葉、心と身体のかかわりに関心やらこだわりがある人、自分のからだと言葉、言葉と心に隙間があいているような気がしてどこか落ち着きの悪い人、そういう人はこの際欺されたと思って来て見てほしい。君の既成の概念を覆す発見が待っているかもしれない。何にも発見が無かったとしても、そういう発見や出会いから疎外された自分の状態の原因が何故なのか、発見できるかも知れない。百聞は一見に如かずだ。

●私は一ヶ月後の文化祭で演劇をやる。そこでその参考となるものが得られればといった気持ちで同じ演劇をする友人とやってきた。

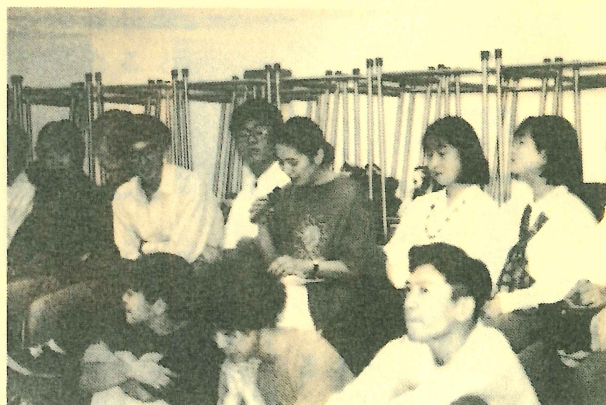
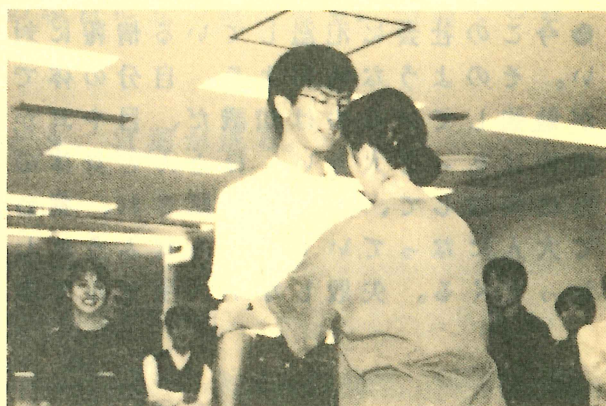
終わってみて、今日の講座は本当に楽しかった。楽しいだけならまだしも、「劇が人間のものである」。変な言い方だが、人間が自分以外の人間と一緒につながり伝えあうことが劇であり、そして、そのものが人間というものであることを教えてもらったと思う。それまで私は、劇がこんなにも素晴らしいものである事を知らなかった。

勿論これは如月さんがおっしゃった劇的瞬間とはニュアンスが違うだろうし、また演劇も劇の延長線上にあるとはいえ、少々性質が違うと思う。だけれども、人間が個人のみの存在でなく、初めてあった人同士でもここまで影響しあえるのだという事実をここで身をもって体験できた事がとても大きな収穫だったと思うのだ。（理系高3グリーン生 男）

●高校生かつ最後の文化祭を一ヶ月後に控えて、参加したが、如月さんの言うとおり、劇は「劇的瞬間」なのであり、その緊迫した空気を観客と共有できてこそ、劇なのだと思う。今日の講座で味わったような「ふっきれ」を超越した緊張感（それは、セリフの内容に関係ない事が今日わかったが）を忘れずに励んでいきたい。（文系公開単科生 男）

●とても自然に劇団の人たちが私たちが少しずつ引っ張り出してくれたように感じました。演劇というものは「演じる」事ではなくて、自分の中から、ふだん見えない自分を引き出して、その自分にひたる事なのかなと思いました。

如月さんの少しのアドバイスで、あれほどその人の魅力が表情に浮き上がってくるものなんだな、と吃驚しています。あんなに楽しい2時間を過ごした後、いわゆる「日常」に戻るのがちょっとつらいです。（文系大学受験科生 女）





泉谷しげる TALK&LIVE

激励
コンサート

7月14日(火)

一ツ橋ホール17:30開場

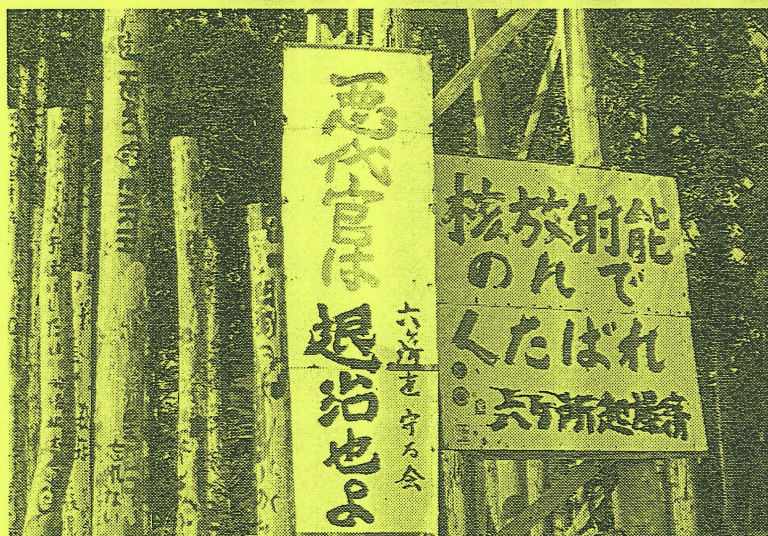
参加申し込み方法は裏面を御覧下さい。

河合塾

核

プルトニウムの 輸送問題を中心に 「原発銀座の若狭から 六ヶ所村から」

「核」の旅は死の旅だ—英仏の再処理施設で抽出されたプルトニウムを間もなく日本は自国に運びはじめる。問われているのは輸送の安全性だけではない。47年前に長崎の街を破壊したプルトニウムが、今後20年間に30トンも日本に運ばれる。それも、資源に乏しい日本を救う夢のエネルギーというふれこみで。(『ニューズウィーク』日本版 1992・8・13/8・20夏季合併号)



下北半島 六ヶ所村

『ニューズウィーク』夏季合併号表紙は「日本人は核が好き」—世界が怖がる日本のプルトニウム輸送作戦—と大きな見出しで報じ、特集を組んだ。

現在、フランスのシェブール港から日本に運ばれるプルトニウム1トン(原爆120個の製造が可能な量)の輸送に対し、世界中が大きな関心を寄せている。プルトニウムを燃料として使う高速増殖炉はアメリカ、ドイツをはじめ各国で、環境面や安全対策上の理由から建設は断念、運転は中止され、再開の目処は立っていない。

海外からの厳しい批判にさらされながら日本では、なぜ六ヶ所村に代表されるように拡大路線をとるのか。

唯一の被爆国である日本がなぜ強引なまでの方法で強行するのか。

そうせざるを得ないほど核のエネルギーに頼らねばならぬのか。

チェルノブイリ原子力発電所事故で明白のように、安全性に絶対はない。日本の「原発銀座」といわれる福井の若狭で、実際に反対運動をされている中島哲演氏と、下北半島の六ヶ所村を一貫してリポートされている鎌田慧氏に話していただく。

なお、スライドを上映する予定。

講師

鎌田 慧 (ルポライター)

中島哲演 (明通寺住職)

司会

松井道男 (英語科講師)

10月16日(金)

17時30分～

千駄ヶ谷校

東校舎 721教室

ODA(政府開発援助)と 環境破壊

日本のODAの光と陰とは？
ODAの環境的配慮の
欠陥について考えてみよう！

日本には開発援助関連の調査・研究機関がないことから、開発途上国の問題に関する十分な知識・情報が蓄積されていない。そのため、日本の援助が援助受け入れ国の自然環境とか人々の社会生活とかにどのような影響を及ぼすかについて、十分な検証が行われないままに、開発途上国に対して援助資金を振り向けることに主要な関心が注がれ、金額面での実績が重視されることになる。

この結果、援助受け入れ国の「持続的開発」にとっては、かえってマイナスの効果しかもたらさないようなプロジェクトが数多く実施されることになる。

日本の援助には、光と陰の部分がある。日本政府は、青年海外協力隊とか難民救済、飢餓救済、災害援助など、援助の光の部分を前面に押し出して、国民の援助に対するイメージ形成を図ろうと務めている。そのため、一般には、援助の陰の部分は、国民には知られてきていない。

◇
一九八九年世銀・IMF年次総会は、九月二七～二八日にかけて、ワシントンにおいて開催された。これに並行して、二四～二九日かけて、世界の五〇カ国以上から集まった環境保護団体、人権保護団体などにより、国際NGOフォーラムが開かれた。

◇
会議最終日には、「日本政府に対するアピール」が採択された。このアピールにおいては、「日本のODAが、開発途上国における社会・環境問題を醸し出し、また悪化させてきている」ことに鑑みて、「開発援助に環境アセスメント制度を導入すべきこと」、「開発プロジェクトによって影響を受ける現地住民の声に耳を傾けるべきこと」、「援助案件に関する情報を公開すべきこと」、「大規模ダム・灌漑プロジェクト、熱帯林の伐採などの環境破壊的なプロジェクトへの融資を行わないこと」、「現地住民のイニシアチブのもとに実施される小規模プロジェクトを優先すべきこと」、「過去のプロジェクトによって損傷された環境の回復に対して資金を供給すべきこと」などの勧告が表明された。このように、日本のODAに対しては、国際的な批判の声がますます高まりつつある。とりわけODAへの環境的配慮の欠如が強く指摘されている。現状に抜本的な変革を加えない限り、近い将来において、国際的な非難の嵐の到来は、避けられないといえよう。（『ODA援助の現実』より）

講師 鷺見一夫（横浜市立大学教授）
司会 環境問題研究会

プロフィール
愛知県出身。国際環境法専攻。
ODA研究会代表。
著書「ODA援助の現実」（岩波新書）ほか多数。

9月19日(土) 13時 横浜校 5N教室